

「現代の貧困問題を突き詰めていくと アダム・スミスに立ち戻ることになる」

フレームとしての原理の重要性を 再認識させられる

最近、NHKをはじめとするマスコミが、盛んに貧困問題を取り上げるようになってきました。現代の貧困問題を考えると、改めて経済学とは何かという問いに立ち返らざるを得ません。

経済学は大きく全体フレームに関わる分野と、他方、その具体化・応用、或は各個別テーマ分野・パーツに分かれます。

フレームとはprinciples、つまり経済学の原理です。いわゆる経済学の大家が打ち出してきた資本主義論が、それにあたります。大家が何を打ち出してきたかという、それは「富の生産と分配」論です。これこそが経済学の基本的課題であり、フレームなのです。最初にその体系を示したのがスミス『国富論』(1776年)です。スミスによって示された資本主義経済のフレーム、原理は今日でもその意義を失っていません。

最近、私自身、スミスが中心課題とした「富の生産と分配」が、現代でも重要課題であることを強烈に再認識させられています。

スミス経済学の主張は、市場経済が発展していけば富の生産が増大し、その分配が社会の底辺にまで行き渡るという「トリクルダウン」論にあります。しかし、産業革命後、富の生産が増えても貧困問題が発生し、富と貧困の同居という矛盾が生じてきます。スミス経済学を修正・展開し、その矛盾を解明する道を開いたのがマルクス『資本論』(1867年)です。さらに、巨大企業と帝国主義の時代に入り、ドイツのR.ヒルファディングやイギリスのJ.A.ホブソンが資本主義のこの新たな段階の研究を行い、レーニンが両者の成果を『帝国主義論』(1917年)

としてまとめました。「富の生産と分配」問題は、レーニンにおいても主要課題をなしています。

現代日本の抱える課題は 結局は「富の生産と分配」だ

最近、NHKが「ワーキングプア」という質の高いシリーズ番組を放送しました。それをもとに日本の貧困問題を考えてみましょう。

まず、母子世帯、および病気失業中の父親を2人の娘がパートで養っている貧困世帯のケース。これは非正規雇用の低賃金問題に他なりません。次に、岐阜県で洋服成型を営む自営業世帯の貧困。これは、グローバル競争圧力下での下請け労働者の賃金引下げ問題であり、やはり低賃金が貧困をもたらしています。賃金問題は分配問題です。地域の貧困ケースとして挙げられた、もう一つのケース、秋田県の洋裁自営業者の貧困。これは、農業政策放棄による農業・農村の疲弊の反映であり、無年金のためアルミ缶を拾って暮らす京都の老夫婦世帯の貧困と同様、その背後には、国の政策の貧困があります。こうした日本の税・財政政策は、所得の社会的再分配問題に他なりません。最後に、若者のホームレスのケース、或は親のリストラ 非正規雇用のため高額学費に耐えられず大学進学を断念せざるを得ない生徒のケース、こうした貧困とその再生産も国の政策欠如の産物であります。

非正規雇用労働者の低賃金問題、下請け労働者の低賃金問題、農



業・社会保障・教育政策の問題、これらは、結局、富の分配・再分配の問題に他なりません。

現実の課題が解明できなくては 何のための経済学かわからない

GNP大国、日本で、飢え死にが多数発生しています。まさに、スミスが説いた、その後も経済学が長年向き合ってきた「富の生産と分配」の問題が、今なお問われているのです。

もちろん、スミスやマルクスの議論そのまま今日の貧困問題が解明できるわけではありません。課題は共通でも、(1)多国籍企業の影響力の増大、それに伴う(2)グローバル競争の激化、(3)地球環境制約の深刻化、この3点において当時の資本主義と現代とは舞台装置を異にします。この新たな条件の下でいかに富の生産と職・雇用を確保するのか。そして、海外投資収益を含めた国民所得の分配を国民生活に繋げるべく、どのように国家、社会をデザインしていくのか、現代の国富論が問われているのです。

今の政治家や官僚にはこうした問題意識が薄く、政策もその場しのぎで、国家のビジョンを示していません。スミスは、当時のイギリスにおける国富論を説き、ケインズも1920年代の大量失業を前にして新しい経済ビジョンを提起しました。

日本の政策担当者に限らず、研究者こそ、今日の貧困拡大・社会崩壊の現実に対峙し、現代の「国富論」ビジョンを示すべき時です。国民の生活保障をどう確保するか 大きなフレームでの現状把握、それに基づく政策提言が求められています。経済学は、この課題を意識し、受け止めなければなりません。

私は若いころスミスやマルクスの研究を行っていました。この数年来は、80年代以降のグローバル資本主義下の「富の生産と分配」に対する批判を行っています。最近、両者の研究の繋がりを強く意

識するようになりました。考えてみれば当然のことです。富の生産・職を確保し、得られた富を人々の生活に結び付けていくにはどうすればよいのかという問題は、スミス以来の経済学の大家が一貫して取り組んできたテーマですから…。

将来に希望が持てない層が広がり、餓死者まで出す日本社会の劣化、そこで暮らす国民の痛み・叫びをヒシヒシと感じています。それを放置し続ける政府、無視する研究者に対する怒りも感じています。私自身、これまで研究を30年近くやってきた者としての存在意義が今問われているのです。

大学の使命は 市民社会のリーダー育成だが…

教育者としての立場で大学を考えると、一橋大学の役割は、経済・政・官界、そしてなによりも市民社会のリーダーを育てることにあります。国際レベルの大学なんていうフレーズは空言葉で、中身がありません。リーダーの条件とは、幅広い視野とバランス感覚です。既存概念や権力からの精神的な自立がその前提になります。

翻って現代日本の高等教育の状況を見ると、忸怩たるものがあります。テキスト教育・教育のマニュアル化、大学本体のビジネス・スクール化、大学の法人化 = 「官僚機構の下部機関化」…。幅広い視野とバランス感覚、自由な精神を養う環境が失われています。

学生に期待したいのは、問題意識を持ち、自分と異なる意見とぶつかり、自己を確立することです。また、古典に親しむことです。時代を生き抜いた古典からは幅広い視野とバランス感覚を読み取ることができます。リーダーは、またそれなりの志を持つことが必要です。美術・芸術に接し、美意識を磨く。美意識と志は同じ空間にあります。こうした一見不必要と思われることを学ぶことでリーダーが育つのです。(談)

経済学研究科教授

福田泰雄

Yasuo Fukuda

1970年一橋大学経済学部入学、
1981年同大学院経済学研究科博士課程卒業、
1985年一橋大学経済学部講師、1992年同大学経済学部教授、現在に至る。
その間、1992年4月～1994年3月イギリス、レスター大学客員研究員。
2003年3月京都大学博士(経済学)取得。

